

麻生路郎★主宰

川柳の雅証

雑談

客・番傘が川柳の定義を募集して
ゐますが、どう思われますか。

主・驚いてゐる。

客・どう驚いてゐられるのです
か。

主・定義といふものは指導者が指
示するものだらう。

客・そうです。

主・だとすれば番傘の指導者は今
まで定義といふものを持たなかつたのか。

客・そうかも知れません。

主・それにデیفinitionといふものは短いほどいいのだが、番傘が募集してゐる四百字詰三枚といふ長さでは定義の範囲か

ら逸脱してゐやアしないか。
客・全くですネ。しかし一つの論文としてならどうでせう。

主・論文としてなら問題は別だ。
一般に川柳に對して認識を深め

させる譯だから……。

客・川柳祭を御覧になりましたか。

主・見たよ。

客・アレはどうですか。

主・問題ぢやアないネ。

客・徳川夢聲の作品や選句ふりを見てギフンを感じてゐるんです

が……。川柳祭について何も書かれませんか。

主・僕が書かなくても若い人たちが缺つてゐないだらう。

客・そうです。あちこちで問題に
してゐます。しかし、川柳家は

狭量だとか云つて、あの連中の提灯持をしてゐる川柳家が出て
來ましたよ。

主・それは狭量といふ文字の使ひ
方を知らないのだらう。

客・……。

主・僕もあの記事は讀んだ。川柳
のためにはとても熱心な男だが

惜しいことには創作と戯作との
差別がハッキリしてゐないのだ

らう。川柳祭はあそびで出して
ゐるのか、營利が目的なのか知

らぬが、あそびで儲かれば、こ
れに越したことはないといふの

だらう。

客・それが有名な寄合ひだけに
始末が悪いですネ。

主・いかに有名な人であらうと、川
柳の畑へ來たら全く素人なんだ

から、ホントに川柳したいのにな
ら、そこにはけんきよな心と、

作品に對するある程度の精進が
要求される筈だ。厚顔無恥な態

度でノサバツて來れば人間的に
輕蔑されるだけだ。

客・素人としての自覺がないので
せうか。

主・それがあつた位なら問題は起さ
ないよ。そりやア素人でもたま

に二貫目もあるかぼちやをつく
のかぼちやを二つや三つ作つた

は問違つてゐるからネ。

客・全くですネ。

主・末摘花の刊行はどうです。

客・古句研究に名をかつて、うら
んかなの仕事をやつて、研究が

目的なら必要はない。紙價値時
集を出す必要はない。紙價値時

代にあの千本刷の紙を見たまへ
しおかしな顔つといふのから

主・全くですネ。

客・明治時代に、窪田而笑子君が
百冊複製して下谷署に擧げられ

NO.
245

日本樂器ゲリル

心齊橋筋周防町角

高血壓 動脈硬化
心悸 亢進に
ハセスロール錠

50錠 7.30
100錠 15.00

塩野義製藥





續川柳講座

(6)

麻生路郎

眞實味の句に就て

眞實味の句を説く前に、眞實と事實と云ふことに就いて少しく述べて置きます。眞實は英語の「True」であり事實は「Fact」であります。そしてこの眞實と事實とを混同しないやうに注意しなければなりません。事實をありのまゝに詠んだからと云つて、必ずしも名句にはならないのであります。むしろ事實をそのまゝ詠んだ句の多くは報告に過ぎない句としてしりぞけられるのであります。ホントの句を創れと云はれたからホントの句を創つたら捨てられたと云ふ聲を聞きますが、その作家のホントの句と云ふのは、事實をありのまゝに詠んだのに過ぎないのであつて、所謂ホントの句と云ふのは眞實味の句を指してゐるのであります。即ち人情のこまやかさに、眞善美の眞を活かせと云ふことなのであります。言葉をかえて云へば眞と善とを混和させた句を創れと云ふことなのであります。

第一次世界戦争の時、僅か

一ケ年間にドイツで出版された愛國詩は百五十萬種から上つたと云ふことであります。が、それ等の詩人達は都會から出征した兵士たちの氣持がまるきりわからなくて、人爲的に作つた人氣取りの詩ばかりであつたのでんで彼等の耳には入らなかつたといふことであります。そして戰場では

森の小鳥よ
すてきな聲よ
くにて故郷で
また聞かう

と云ふやうな文句の唄が兵士たちの口から口へと傳はつたのであります。主戦論や侵略主義の要素を多分に盛つた唄が何んの役にも立たず、小鳥に呼びかける兵士たちの頭の中には故郷に残した妻子の外には何物もなかつたのであります。右に述べた小さな唄が兵士たちのホントの聲だつたのであります。そうしたホントの聲を川柳の上に生かしたのが所謂眞實味の句なのであります。古川柳に、
南無女房乳をのませに化けて
來い
と云ふのがあります。乳呑み子を残して、女房さきだた

れた男の悲痛な叫びであります。一見して一般に世間から所謂川柳の持つてゐる要素だと信じられてゐる諷刺でもないければ、皮肉や滑稽でもないことが判るであります。刀三の

地獄へ行くならむ死にたくはなし
薄情の喰べたくないをくりかへし
裏切つた女よ人の子を生め
酒にのまれたるなど嘘と思へり
何も願はずにただ生きていかな

などを味讀すると作家刀三の透徹した眞實味が、ひし／＼と迫つて来るではありませんか。情熱のやりばを常に川柳にもとめてゐた刀三はある意味の啄木であつたかも知れないのであります。彼は彼の短い十七音字詩を完成するに至らずして胸を病んで亡くなつた妻の看護のあと、彼も又同じ病ひで夭折いたしましたのであります。

右に述べた句は何れも主観句であります。それが客観の句として詠まれた時、深い同情となつてあらはれます。同じ作家の

親類へ馬鹿を頼んで父は死に
が、それでありました。父が死んでからはじめて、父の有難味が判つたのであります。この句からは亡き父に對する同情がにじみ出て居ります。眞實味の句はいくらでもあります。次に四つ五つ例示いたします。

ほろ／＼として小兒科の扉をあ

安産のために

ワダカルシューム錠

安産メーター・文獻進呈

大阪市大淀區豊崎東通一ノ四六 ワダカルシューム本舗

け 子と呼ぶ聲に外聞もなし (零骨)

酔はねば言へず酔へば悲しき (飯山)

姉さんにまけずに生んでみじめ (松郎)

嬉れしきは手紙の中にまた手紙 (雅園)

「か」止めの句は「柳樽」の四篇に (同)

「か」止めの句

唐がらし辛いといふにそれ見たか
と云ふのがあることにはあります。が、「武玉川」にしても、「柳樽」にしてもあまり用ひてゐない形式の一つであります。

妻や待たん靴音を高めんか (路郎)
は大正初期に「雪」に發表した句であります。當時は斯うした心境を詠んだ句を異端視して全然川柳でないやうに云うたり、新傾向々々々と云うて敬遠されてゐた時代に出來た句であります。しかし新婚當時の若さを「靴音を高めんか」の「か」でハツキリ感じさせてゐるのではないかと思ひます。この場合の「か」止めは單に句意を強化するた

め、用ひたのであつて、誰か

高級化柱料容器には断然！
ヤマギンの……
黒硝子
大阪市長府西區一丁目四番
山銀株式會社
電話 堀川四七番

に質問をしてゐる譯ではありません。強ひて云へば自分たづねて、自分に答えてるといふ形式の「か」止めであります。「か」止めの句は右に述べたやうに、單に句意を強調する場合や咏嘆する場合の外に、疑問の意味を表はす場合や、反語の意味を句外に表現したい場合や、ものを問ふ形として、用ひられて居ります。糠袋 曰くあなたはあまか (五葉)
の「か」止めは單に「お妾か」と問ふてゐる形であります。が、その言葉の裏には嘲笑の意味も含まれてゐて、頗る微妙な表現だと云はねばなりません。古句に、

お千代さん鯛がひろく泊まらうか
と云うのがありますが、「お妾か」の句と同じやうに問うてゐる句ではありませんが、前者は嘲笑であり、この句は揶揄であります。お千代さんとは加賀の俳人千代女のことであり、夫が亡くなつたので「起きて見つ寝て見つ鯛の廣さかな」の句を詠んだのに對して川柳でからかつたのであります。

次に「か」止めの句を列舉して見ませう。

戀の民あゝの眼だらうか眼だらうか (路郎)

秋やよし焼都のなかに咲く戀か (丹路)

手についた靴墨これも生活か (久米雄)

齒のとれた櫛老婆は五十五か (久留美)

警察の椅子こんなにも冷たいか (三華)

乳哭れと泣いてゐるのが聞えんか (史風)

むかしむかし稼げば樂になりしか (豆秋)

總選舉又鐵道でだます氣か (亭々子)

泣いてゐましたが思ひ切るでしようか (石竹)

失戀のときに死ねとの緋しごきか (白蝶)

錢をよむ乞食お前もインフレか (小松園)

寝る時間さへ惜しみなく贈賄か (明珠)

す。「總選舉又鐵道」でだます氣か」の句意は若い人たちはは判らないかも知れないので少しく解説の必要があらうと思ひます。以前の總選舉と云へば、清き一票を獲得するたために、自分に投票して呉ればこの地方へ必ず鐵道を敷設してやると云つたものなのであります。しかし餘程有力な議員でない限りはなか／＼口約を果たすと云ふ譯にはいかなかつたのであります。絶対に三合配給をいたしますと云つた候補者がそんなことを誰が云つたのかと云ふ顔をしてゐるのと同じであります。この句にしても、「錢をよむ乞食お前もインフレか」の句にしても、一種の時事吟であつて、社會の情勢が變化すると句意が不明瞭になるおそれがあります。

旅の句のこと

要するに「か」止めは巧く用ひれば餘情があつて意味深の句となりますが、ただ漫然と斯うでもして置かうといふのでは、ア、さうですかと云はれる句になつてしまうものであります。

「あと七分で青森でござぬます。どなた様もお乗換えでござぬます。聯絡船は五時半でござぬます。船名は翔鳳丸でござぬます。お忘れ物のないやうに」

こんなござぬますづくしを聞かされながらぼつ／＼靴をはいた時に出來た句が

空氣枕の空氣が抜けりや青森さ (路郎)

と云ふのであります。

君とあれば眼に島を見ず山を見ず (路郎)

これは大沼公園に船を浮べた時に詠んだ句であります。旅をした時の句は敘情的であり嘆美的であります。時に追懷の句となります。一人旅の時と團體旅行をした時とは句の趣きが餘程違つて來ます。

豆のあぶら人のあぶらの尊くも (路郎)

日給になる素ッばだか觀察され (同)

これは大連で縦覽謝絶の三泰油房を特に見せてもらつた時の句であります。兎に角旅の句はむづかしいものであります。殊にはじめての土地で穿ちの句を作るといふことは至難であります。句は自然に寫生句となりますが、よほど注意しないと俳句の領域を侵すこととなります。

旅での即興句は樂屋落の句になり易いので、ヒントだけノットして置いてなるべく歸つてから句に纏めるのがよいやうであります。そこですく

まゝ句にすると、説明的な句になつたり、ひとりよがりの句になつて、月日が経つと作者自身にも句意がボヤケて、一向ありがたくない句になつてしまふものであります。

地名とか、山川の名とか、寺社の名を詠み込めば、兎に角その句にはなるが、單にそれ等の名が詠み込まれてゐると云ふだけで大いには月並な句であつたり、空虚な句であつたりするものであります。

かと思ふと土地の人の思ひもよらぬ句、旅人でなければ詠めない句が出来ることもあります。かほるに

高野山みやげに困る所なり (泉)

と云ふ句がありますが、これで數珠を買つて歸つても仕方がないので困つてゐるとうけとれるかどうか、もう少し外に表現の仕方があるやうに思はれます。それよりも、

妻見の井戸に自分の順が來て (かほる)

の方が面白いと思ひます。だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと

と (路郎)
これは山中温泉での作であります。温泉宿に寢轉んで旅信をしたためてゐた時、あまりにも近い、耳元で鐘が鳴り出したので出來た句であります。これなどは感じだけは出てゐると思ひます。それからあやめが池で創つた句に、

夕櫻とんぼ返りがしてみたい (路郎)

と云ふのがあります。これも感じだけはとらえたつもりであります。

禮詣り
出雲大社に仲のえとこ見てもら (泉)

ズバリと率直に詠んだところが、この句の生命であります。

五葉の句に
大佛の鐘杉をぬけ杉をぬけと云ふのがあります。擬人法で奈良を巧みに描出して居ります。餘韻じやう／＼たる鐘の音が手にとるやうに聞えて來ます。

近畿日本鐵道

伊賀・伊勢方面へは
紀伊方面へは
河内・大和方面へは

のりば 上 六
のりば 難 波
のりば アベノ橋

川柳塔

兵庫縣 岩崎 柳

路

空襲でなし晝飯のサイレンだ
泣き事も書いて置こうよ日記帳
隔世の感焼跡で立話し
三文判生活資金へ強く押し
USAの罐詰へ辭書繰つて見る

大阪府 川村 好

郎

銀翼も手巻機械になりにつけり
二一年地震でやつと幕になり
比島より遂に歸らずお正月
紹介の手前名刺は貰つとく
こうもりのやうに買出し乗つて行き
嘘の世を生きんがためのさげ靴

岡山縣 濱田 久米

雄

歸農三年の正月

我が汗のお鏡餅の白いこと
凍死せし同胞もある松の内
同權よ今度は脊廣賣ると決め
三回忌まだあの頃でよかつたネ
貯金帳次から次へ零となり
貯金奨励それはヤミ屋に言ひなはれ
英靈がリユツクの波にもまれて居
報償物資女の歡心買ふ如し
追剝のやうにインフレ裸にし
學のある旦那田を賣り山を賣り
民主化の選舉やつぱり金が要り
愚直とや神にも近きいゝ寝顔

堺市 戸田 古

方

滋賀縣 北川 春集

満ち足りたくらしと見えて靴光る
蒐集家故人のはがきまで集め
満員車ギターを持つて斷られ
曾我廼家をマスクを掛けたまゝ笑ひ
岳父還歴

大阪府 武部 香

林

乗り換へてまだ明け切らぬ初詣
おとなしくすると初風呂風邪を引き
吉田首相に呈す

注射薬持たねば醫者を辭めなはれ
窓口は四角に計りものを云ひ

大阪市 市場 沒食子

組合のビカ一遂に風邪を引き
ボロ儲け輸送の事で一頓座
食ひ過ぎた薬をくれにあきれたり

奈良縣 上田 翠光

もてなしの一つに風呂の湯があふれ
取柄なき眺めへ雪をほめられる
豆腐攻めする氣で豆腐仕入れて來
諸曲「櫻川」に題して

人買ひはごまかしもせず拂いに來
清經は死んだ云ひわけ舞うてみせ
笛の音につれて夫婦はくどくなり

大阪市 小橋 隆如

どか貧に我が家もこれで民主主義
列なかなになつてネクタイ風を入れ

兵庫縣 竹内 潮花

革命の唄紙を打つ音もせず
生活苦父の信念どこへいた
啄木を読む灯靜かな雪が降り



川柳 農閑戲筆 (上)

鈴木 石鹿

農閑の一日書棚から抜いた一冊
が「川柳のぞき」麻生路郎師の選
句に島平外四氏の漫讀解説のある
川柳集。先生が川柳の社會化のた
めに物された著作の一つで昭和六
年の出版。頁をくると餘りにも二
十年の歳月がひし／＼と身に迫ま
るので、その時代の姿を讀者諸氏
と共に回顧して見たいと筆を走ら
せる。

最初の一篇が「赤い灯青い灯」。
この六字、私達の青春を浪費した
六字。カフエー・酒・女給……。
今にして思へばよくも罰が當らな
かつたと思うが、今その罰を受け
てゐるのでせう。

梯子酒知らぬ人まで吞ますなり
二柳子

今の縁雨さんの句ですが、二十
才臺の若人に梯子酒の味がお解り
ですか。況んや知らぬ他人に酒を
吞ますなんてことが……酒だけ
じやありません。

大連にて來て食堂に據がられ

紅の花

テキカカツかを犬に喰はしてゐ
る繪が添へてある。漫畫に依れば
ランチ至・五〇、コーヒー五錢、
トーストパン十錢の時代です。
趣味と娛樂篇には變つた所があ

りませんが、衣食住篇にはコペル
ニクスの轉回がファンダンに見られ
ます。
足らぬもの勝ちで嬉しい差し向
ひ
この足らぬもの勝ちの新世帯の
畫が、ナンとスキ機で差しつ差さ
れつと云ふのです。

結核

新治薬の特効薬

ネオハツモン

コメット

田田製薬株式会社

送り膳一人は傘をさしかける

寸馬

何か事あれば、他人様に吞めよ
喰へよと強制したものです。物は
あつたがお金銭はとなると

男女同權あゝおろかしき女ども
憲法實施まつて解消しませうか
アスハルトあゝ放浪者の夢を吸ふ

大阪市 福田 安 夢

粉な雪の女は小説的に見え
こがらしは止まず二人は和解せず

尼崎市 水谷 鮎 美

酒の灯におもひ出おほくのんでゐる
にこうさん旦那の釜は別に置き

大阪市 浪 玲 介

スキヤキになる迄兎いたわれ
此の頃の検事程よく世馴れたり

配給を信じ子供にだけ喰はせ
家計簿はもう捨鉢としかとれず

子に強く時代に遠き女なり
吉田首相思案を隠す懐手

大阪市 村上 角 堂

復員がおんなじ友の妻も産み
みなさまのニュース館ならすぐに出来

大牟田市 高田 抱 逸

年とり勤めたやうな俺の腕
四十からミシン習ふも遺骨故

奈良縣 尾崎 方 正

左様なら平民士族華族様
情熱が足りないわよとせめられる

大阪市 水谷 竹 莊

子供から教へられてる假名づかひ
松の内一寸のんでも五百圓

薄情な男閨屋でよく儲け

竹を編む技を覚えて孤獨なり
同居させてからの思ひが違つて來

鳥取市 中島 鐵 洲

政開先錢のある間を親まれ
新圓に折り目もつけず母の錢
立話五萬圓貸せ二三日

姫路市 夷 一 笑

茶の香り大平洋を越へてゆけ
建設の音をきゝつゝおうすたて

自轉車の兩手はなして春うらゝ
罹災者に春の陽ざしはよきものぞ

沒收の米のゆくへを話合ひ
春さみしつぎの當つた靴磨く

賣家の梅の蕾をいとほしみ
春眠を配給物におこされる

馬 齡 五 十
五十年これから詰手考える
根を堀れば大阪で培つた思想

横濱市 福田 山雨 樓

遺骨を抱いて父の兩手を頂きぬ
御近所の人に英靈莞爾とす

針供養明治天皇さま時代
理窟とは別さお詣り笑へまい

いつよせた鑑か鏡にうつる顔
夜る夜中鼠賊のやうに蚤が出る

義理の中買出しなどで生てゐる
老後の相談政府して來れず

引揚者灰皿を借り瓶を借り
馬車馬のめかくし欲しい物價高

松山市外 前田 五 健

金澤市 安川 久留 美

大阪府 橋本 綠 雨

三重縣 麻生 葭 乃

銅錢がなくて鳥居を拜んどき
賽錢の方へ神様氣をとられ

神様へあげる五錢を惜しみ、貰
ふ神様も御同様の有様。「芝居と

映畫」へ目を轉じると
煙だけ残して消える松之助

阪妻を語り巡査のまだ若く
映畫初つて以来の名優目玉の松

ちやんの忍術ものや、阪妻の殺陣
が天下を風どし、漫畫に描れた如

く活辯が闇の中で、美辭麗句を並
べてファンを唸らしたものです。

松木狂郎、里見義郎、石田旭花、
東堂荷村等々の名はいまだに忘れ

られないのです。
活動で寫眞と合はぬチヨボを開

幕のうしろに嘶し方が居り、幕
間には「ラムネどう、おかきどう

……」なんて中賣がありました。
中賣りはラムネの口を膝で抜き

職業と職名篇を眺めると、そこ
には、サービスと廣告とが汜らん

してゐます。
乗れるだけ乗つた自動車ビラを

撒き
宿引の平手は掏ひ入れるやう
そして一切の取引は掛と月賦と

で行はれ、
月給日辦當屋靴屋洋服屋

又色々な行商が戸毎に訪ねて來
たのですが、その中に
廢兵へ下女要りませぬだけで押

し
今の傷痍軍人に對し、この下女
の態度と同じものを有つてはゐる

しないか？三省を要すると云ふも
の。
黒いのを一本まけるバナナ賣り

二三日前の新聞に、バナナ船が
入港して近く何処とやら配給され

るとか、報導される日本となつた
のです。次は「世はさまさま」の

姿に一瞥を與へると、錢湯が目につ
いた。地獄相の一つの錢湯否圓

湯も昔は一つの極樂境であつて
眼目をして相對す藥風呂

五 葉
そこに哲學が生まれ、詩が流れ
浪花節が洩れたのであつた。



近作柳樽

矢の如き歸心をはさむ自動扉池田市牧人
えいとしの御寮さんから賣に出し
感情の露出 近頃 左前
母ひとり娘ひとり紅も濃ゆくなり
喰えかねる點では同じ手の白さ
マント着てゐるで本屋に氣兼ねる
上品にならねばならぬ金が出来
警官の投げたは髭のない双葉吳市彩
還暦も近く甚平着せられて
洗もの漬つばなしへ雪となり
願懸けを神主チヲと見たばかり
代業は淋しき素性聞かされる
あの時の榮譽も哀れ麥を踏み
馬乗りになつて石碑の碑を書き
どつちでも嫁くと娘は手古摺らせ
渡場もあつて繪になる松並木高槻市丁
要點をそらして笑ふ時の人
物凄いや月が傾く戦災地
尿する夜警の息が凍るなり
インフレを云ふてゐられず嫁にや
思想的悩みに瘦せてゐる若さ
封切の映畫へ並ぶ日の寒さ
春の宵魔術の様にすられたり
大闇は逃れ小闇は抑へられ鳥取市
常顧客だけへ奥から商はれ
千圓の割前で飲む間仲間
疎開跡えたいの知れぬ家が建ち
母屋より廂の方がよく嫁ぎ
普通では買へぬ切符へつかませる
飲まされてからその筋の手がにより

町會を辭めた男の店開き浦和市美江
食べかねて委託販賣所を頼り
産聲と共に生死へ投げ出され
それ丈けに怖い近所の馬鹿廿歳
復員の順に近所に子が生れ
餅の徹それも昔の物語
お鏡を心のまゝに丸くする金澤市美瓜露
風聲へ女の弱さあからさま
ペン作る事を知つてゐる時代の子
雪の山やはり豊かなものに見え
母と娘の暮し炬燵で飯にする
ブローカをするにも先に金が要り
小島思へらく人間世界の住にくき山口縣柳
三分の二は只ワア／＼ストライキ
投キツスはでに交又で別れたり
ストライキ今日は魚を釣に行き
暇な事受付嬢のかんぜより
氣は氣でも新聞見る手老をみせ豊中市柳
二次會は、ネクタイのいらぬとこ
停電は停電にして親父呑み
向ふ向く娘財布を開けており
暮り行くビルへ自動車小さく待ち
文化論腹こしらへて聞きませう愛媛縣棟
残留の中への希望淡くなり
白砂青松冬の海邊のさはがしや
藝は身を助けて追放組の團基
明るさは窓口事務の世辭をき、津山市茂穂
よい父になり切つてやる三ヶ日
食はせろと叫ぶ口からきく諷ひ
内閣は誰方でもよい明日の糧
お世辭たら／＼女戸主の店岐阜市周峰
ニツコリと笑へる嘘を間屋持ち

洋妾のつらさを開けば飯の時
雄子郎
らしやめんの名も愉快だが、つ
らい飯の時の爲に、現在の女性
接吻を與へることを光榮としてゐ
るのだ。
新妻と立てば圓タクみなとまり
秋 草
なつかしの圓タク……圓本……
一圓の魅力は忘れられないもの
一つである。
爺々婆々の喧嘩は眞ばかり喫ひ
著 八
こうなれば二十圓のピースじや
うっかり喧嘩も出来ません。
妻結はぬこともしまつの數に入
れ 路 郎
勿論丸マゲです。日本髪まだ衰
へず、洋髪は耳隠し全盛、所謂モ
ガが斷髪をしてゐた位のもの。更
に筆を「廓の春秋」篇へ轉ずる。
終戦と同時に、自由の聲と共に
長い間の「公娼制度」に斷乎とし
て最後のピリオドが打たれた。今
では自由な女達の稼ぎ場と化して
昔の情緒は棄にしたくもなくなつ
た。
三人の舞妓三人 燃えるやう
三 太 郎
身受して始めて金のありがた味
路 郎
泣いてゐる窓とは知らず景色屋
維 想 樓
朋輩に慰められて もう半期

突 支 坊
琵琶藏者だけ東髪がよく目立ち
柳 路
てこ舞の姿且那のお氣に召し
凡 平
舞妓達に燃える程着せるには、
今なら萬のつく金が必要となると
もうこうした姿も見られなくなる
のは當然。その頃の金の有難味の
解かつた身受の金は今では一夜の
遊興も覺束ないとしたならインフ
レの恐ろしさに慄然とする。琵琶
藏者、てこ舞、一切は過去のも
の。
次には「年中行事」篇。
年賀狀 内職ほどに 擴げられ
南 枝
年賀狀百枚出せば足る暮らし
光 哉
こんな御時世が何時還り来るや
一陽來復の日迄働け／＼だ。
やぶ入りの子へ二つ割る寒玉子
磯 松
「簞入り」と云ふ言葉さへ忘れた
今日だ。つましかつた徒弟制度
奉公制度は歴史の一頁に記される
だけだ。そして今はスト々々々々

次 號 豫 告
★第二卷二號(通卷二百四十
六號)は麻生路郎師の文藝
賞受賞記念特輯として刊行
★路郎師に關する面白い短文
秀作は有益な記事も多し
★原稿締切は六月二十日、審
編輯局、川柳雜誌編輯局宛

豐岡出張

山陰三日の旅より

川柳不朽會便り

来ないので案じてゐたが快方に向
 つてゐられるとのこと▼高鷺亞鈍
 氏はフタバカップ株式会社取締
 役社長に就任された▼上田翠光氏
 は自村の文化方面に關する世話役
 として活躍されてゐる。▼前山北
 海氏は水の變つた内地生活にも務
 げず健康そのもので進駐軍に勤務
 されてゐる▼吉田水車氏は名古屋
 市千種區観月町一ノ六五に轉居さ
 れた▼山根臯人氏(松江)は年末
 に令閨の母堂を亡くされ、その涙
 のかはかね一月早々から令閨が病
 臥され幼い子達二人を抱へての看
 病でなやんでゐられたとのこと慰
 めるのに言葉もない。一日も早く
 快癒を祈る▼戸田孤蓬氏は古方と
 改號された。▼市場沒食子氏は東
 中川國民學校の校報「東中川」に
 兒童よみのとして「川柳について」
 を執筆好評を博された。▼新
 川博也氏の嚴父泰次氏が一月十六
 日に永眠された謹んで悼む。



彼の後悔

—十七字への苦悶—

安川 久流美

長いやうで短いのは人生だ。短い人生から長い意味のものを彼は探した。夫れは歌でなく句であつた。然し短句の内容のよさを解せぬ凡人には句は馬の耳に念佛、猫に小判よりも有がたくなかつた。叫ぶには余り短し十七字と試作した。之も世の中殊に濁つた世へ對する諷刺？不平？であつた。彼の友達が死んだ。其時又同じ意味のことを繰り返した。

嘆くには餘り短し十七字追悼吟である。之では十七字の短さばかりを憂いてるやうなものだ。句をまとめることに彼は苦心した

成金よ庭よ離れよ別荘よ

「よ」の三段がもがいてゐる修辭法だ。成金よ、今贅澤をつゞけていても將來家屋敷を入手に渡す時節が來るといふのか、又はむしろその生活の華やかさを羨望しての客觀か想としては古川柳にはいいつくしている。

賣家と唐様で書く三代目

二代目は人のものを壁をぬり

然し之では落首的な人事皮肉であつて川柳味のもつユーモ

をひらくと

待つたなしのふにさされたる犬養毅

といふ句にぶつかつた。下五はその時の首相人名である。上六字から中七文字迄は先程いうた将棋のことである、そして之れは十八字。一字だけが窮くつでない。

彼はこゝに始めて短文學の自由を見出した。将棋ばかりで無く「角力」にも待つたなし」といふ言葉がある。その言葉から短文學は生れ、川柳は育まれて來たのだ。

彼の頭は再び句に興味をもち、川柳と首ツ引の熱が盛り返して來た。

叫ぶにも、嘆くにも短くてよいのは諷刺文學、即ち「川柳」であることに目覺めてきた。(二二、二、一一)

半金お届け願ひます。揮毫作品が出來たらお知らせいたします。

添削と批評

本誌では初學者に純正川柳を指導する目的で左記選者に依頼し通信に依り批評添削の勞を執ることとした。利用をおすゝめする

規

選者

麻生 霞乃先生
西田 紳榮先生
市場 茂食子先生
米本 貴志子先生
武部 香林先生

▼添削批評の希望者は本誌の直接

下松卓上語

弘津 柳慶

男女同權ですよ。貴男は貴男でめしを炊きなさい。

片岡千恵蔵一座が來た。入場料四十圓也。世帯者は米に換算してみる。

リンゴ一個十圓。リンゴの氣持はよくわかる。

生徒がストライキをやりました、先生が暇で内職を始めた。

引揚者にも、ビンから、キリまでである。闇船で歸つた物持ちと、リュック一つで歸つた人と。

川柳雜誌

「川柳雜誌」の再刊舊號

定價一部三圓送費一圓二〇錢
大正十三年本誌創刊以來のバックナンバー(但し欠號あり)菊倍時
代一部十圓送料共菊倍、四六倍時
代一部六圓二〇送料共

品質優良

ペン先・針ピン・ゼムクリツプ

立川ペン先製作所

上野市

喫茶
みどり

みどりでの商談
運が向いて來る
上六交又點西北角

久し振に御飯を炊きました
が、やはり御粥の方がめしらしい氣分になりました。
近頃の子供は虫歯がなくなり
ました、齒醫者が上つたり
です。
恐しいものです、子供を叱
つたら、ハンガーストライキ
をやりました。



愛 誦 篇

—前號から—

福田山雨樓

馬博士の清貧論に添へたき一句ではある。

火の様な戀へ春風肌を刺し

潮 花

情熱の句。何かしら快感を

覺ゆる。若い作家ならでは創

れぬ境地。人間の美しい情感

が何物をもおそれぬ熱烈さを

もつて迫ってくる。熱の人潮

花氏の面目躍如たるものがあ

る。

星を見てつかむものなし五十七

歩

鳥山氏は、テニス界の大先

輩、その明快な講演ぶりと共

に印象が深い。この句哲理が
含まれてゐる。虚無でも廢殘
でもない。行末をみつめて或
る悟りを開かれたのであら
う。禪味すら感じられる。
おゝそらだ農家に娘かれてやろ

棟 友

一見平易な主觀的表現に託

してゐるが、句想の底には鋭

い諷刺が藏されてゐる。人間

の功利觀を痛烈に槍玉にあげ

十七字を見事に驅使して餘す

ところがない。

花の咲く時節もあらう年忘れ

恒 雄

この句想にはひかれるもの

がある。敗戦國民の腑甲斐な

さは捨てたいものであるが、

現實としてはこの句の感懷に

浸る場合の多いのをどうする

ことも出来ない。しかも市井

人の風流めいたものが床しく

も感じられる。

色 鉛 筆

麻生路郎

るに違ひない。
要は信頼感のもてるたつた一つ
の時計を持つやうに、たつた一人
の選者を選ぶことである。

時計が一つある時には私たちは
其の時計のさし示す時間に對して

比較的信頼感を持つが、時計が二

つあつて、一つの時計が八時五分

前を示し、一つの時計が八時五分

過ぎを示してゐる時には何れが正

確であるか、何れも正確なのか

判斷に迷ひ、結局どちらの時計に

も信をおかぬ結果となり易いもの

である。ある作家が同一の句を二

人の選者に批評を乞うた場合、一

人の選者は佳句であると云い、他

の一人の選者は凡句であると云う

た時、うぬぼれの強い作者は一も

二もなく佳句と云はれた方に賛意

を表するであらうが、一般の作家

は果して佳句か凡句かに戸惑いす

阪 田 謄 寫 版

大 阪 市 北 區 芝 田 町 五 二

會 商 田 阪 式 株 會 社

川 柳 不 朽 洞 會

指 導 生 路 郎 高 安 六 郎 橋 本 綠 乃 二

不 朽 洞 會 員

一 特 別 會 員

一 正 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

一 準 持 會 員

いのちある句を創れ



投稿清規 用紙は原稿用紙 文字を正
切は月廿五日 投稿先本社宛

本社新春句會

於 生 根 社
廿二年 一月十二日

新しい年を迎えて、和やかな會を開いた。岡山縣から風來子君が顔を見せた。葉平、萬よしの顔も珍らしかつた。不朽會員の短冊が賞品として與をそえた。

路郎・綠雨・美奈子・紫香・好郎・潮花・鳩花・風來子・方眠・白柳子・晴峯・竹莊・史葉・葉平・千舟・茂・萬よし・翠光・益三・啓三・進

兼題『名士』

麻生路郎選

表札をまた 盗まれてゐる 名士 紫香
子を抱いて今日は和服で来る名士 潮花
名士だけ揃ひお酒がたらぬなり 綠雨
あちらでは名士こちらで引揚者 葉平
突然に死んで 名士は 疑はれ 孤蓬
優良可これが 名士の 御曹子 晴峯
清元も少し 嗜む 名士なり 翠光
草深く 埋もれ切れぬ 慾があり 茂
失敗談に 名士一層した しまれ 萬よし
呼びすてにされて 名士の 苦笑ひ 北濱へちよい 名士の 未亡人
新實は 名士の 談も 許されず 方眠
新聞へ 小く 死んだ 名士なり 竹莊
美しく 生れ 名士を 父に持ち 美奈子
だのに 名士を訪へば ベルシヤ猫 啓三
隠し 藝 名士おんちで 歌ふなり 千舟
酔顔へまだ 揮毫め 續くなり 路郎
定宿で 名士は 風邪をひいてゐる 同

兼題『福引』

橋本綠雨選

福引へ 平和な足が つゞくなり 潮花
福引で あつた今年の 雜煮箸 方眠
福引が すんで 幹事は 飲みなほし 好郎
福引に つられ 市場へ のびる 足 千舟
福引は 芥子の子供に 引かせて 晴峯
マスクして 引いた福引 二等賞 葉平
福引で 當つた 芋を かついで 史葉
福引で 當つた ラジオだ とい 萬よし
福引に 馬鹿に は出来ぬ 金が入り 翠光
貯金さすのに やれ福引の 景品の 啓三
福引へ 輕いしつとを 意識する 益三
福引へ 女房の 下駄 あてゝくる 三

兼題『會社』

水谷竹莊選

ストライキして 會社名を 知られ 益三
何をする 會社か ビルの 一間きり 孤蓬
人妻となつても 會社の 花であり 美奈子
水膨れ 資産會社に ありは あり 萬よし
賠償に ふれて 會社も あはて 出し 史葉
工場長ひまに 煙草を 巻いて 出さ 葉平
會社員 役得 だけを 食ひ 歩き 風來子
復興の 煙を 吐いて ゐる 會社 潮花
お父ちゃん 居る 會社の 汽笛なり 葉平
會社でも 古顔に なり 庶務の 椅子 晴峯
課長さん 煙草巻くも 事務 うち 好郎
追放令 會社の 首脳 手につかず 白柳子
會社中 社長の 癖を 知つて いる 晴峯
革命の 歌が 聞へて 来る 會社 潮花
社長さん 商事會社を 別に にも 好郎
會社から 眞直ぐ 歸る よい 機嫌 葉平
會社での 餘暇 プローカー して 方眠
會社とは 名ばかり 開屋ばかり 白柳子
組合の ボスター ばかり ある 會社 紫香
子が 出来て 會社の 歸りの 早い 事 美奈子
結婚 相談など 會社も 民主的 史葉
會社とは 別に 課長も 儲けて 竹莊
設計圖 ひろげ 會社は 活氣づき 千舟
兼題『初風呂』 清水白柳子選

初風呂で首をグ／＼廻してゐる 葉平

追放にふれて初風呂も淋しかる 史葉

いそがしき暮れ初風呂でひげをそり 方眠

初風呂であんばい湯ざめして 歸り 葉平

初風呂を貰うて歸る花あはせ 好郎

初風呂へ純綿らしいタオル下げ 綠雨

初風呂に成行き主義で温たまる 萬よし

初風呂は復員の父の手でわいた 美奈子

初風呂へ霜やけの手で流しに來 潮花

夫婦して來る初風呂に雪が散り 紫香

初風呂へ石鹸なんぞなくもがな 孤蓬

初風呂に妻の湯加減問うてやり 翠光

初風呂も 元居た 土地の有難さ 白柳子

兼題『残り福』 大森風來子選

商用の ついでに 詣る 残り福 紫香

残り福 まだ大當り かざつて 居 方眠

女房に せかされて 出る 残り福 葉平

ぬかるみに 笹ちらばつて 残り福 千舟

残り福 ナンパで 高いものに つき 白柳子

残り福 まだダンサーは 儲ける 氣 潮花

残り福 笹の 依が ちぎれ かけ 好郎

二次會の 歸りの ぞいた 残り福 晴峯

残り福 笹は たきもの 並みに 賣り 千舟

残り福 生理休暇の 娘に出 合ひ 紫香

おたやんの 節が とろけた 残り福 風來子

隣組抽籤 留守の 妻の 家に 落ち 葉平

兼題『リリタタ』 丸尾潮花選

リリタタに 値を 上げても 向ひ 風 白柳子

リリタタの 汗も 涼しい 下り 阪 竹莊

リリタタに 小豆の 袋 見破られ 白柳子

リリタタの 客は トンビの 袴を 立て 孤蓬

リリタタを つれて 産婆を 迎へに 來 翠光

リリタタの あつた リリタタ 拾つて 來 好郎

リリタタの 段々 呼吸の 荒くなり 葉平

リリタタの 暗い 道を 攪り 風來子

心得た リリタタ 暗い 道を 攪り 紫香

舊跡を あごで リリタタ おせ くれ 潮花

リリタタへ 腰が きまらぬ 折靴 葉平

兼題『曲り角』 互選

曲り角をおぼへてをくも旅の街 葉平

曲り角まがつて局をおしへられ 方眠

曲り角ヤスク 同志の 立話 美奈子

本社二月例会

廿三日午後一時・於生根神社

道順を教へ別れる 曲り角 孤蓬
此處までは追ふて來ました 曲角 潮花
バタ／＼の音によける 曲り角 白柳子

なか／＼寒さが厳びしい。翠光君寄贈の炭火で暖をとるながら作句に耽ける。この月は珍らしく亞鈍君が顔を出してみなをうれしがらせた。
出席者 路郎・勢三・翠光・系之助・鮎美・雀子・やは子・綠雨・妄夢・英二・繁雄・啓三・進・益三・古方・朱野・登龍・長人・角嵐・淨月女・好郎・喜代志・水客・亞鈍・葉・清・千舟・竹莊・斜水・史葉・香林・喜八郎・庸司・紫香

兼題『同権』

麻生路郎選

同権か リニクサツク のかきこ 翠光
同権もし 飯丈 ぐつぐつ 哭れ 生々庵
縁切寺あつたことさへ 不思議が り 古方
幸福は 同権 論を おかしが り 系之助
同権 今日 前前の 言ふ通り 葉平
同権へ 姑少し 骨が 折れ 進
同権を 鼻で 笑つた タイピスト 啓三
同権ハッピーエンドとは ならず 水客
二階 借して 同権を 主張 する 葉平
同権が 男ズボンで 街を ゆく 亞鈍
男女 同権 どうにも ならぬ 嫁さく 翠光
同権と 別に 炊事が つきまと ひ 淨月女
云ひたい 事を 言うて 仕舞ふ 嫁であり 香林
漫才の ネタに 同権 使われる 竹莊
立候補妻の 地盤の あなどれず 古方
同権を 本氣で 言ふは 哀れなり 葉平
同権の 一票 妻の 立場 から 淨月女
同権が どうのと 探める 美容院 勢三
來週は 妻理事會の 豫定 あり 登龍
同権へ 亭主の 方が よく 動き 妄夢
同権が 遺産を めぐる 慾を知り 史葉
同権を 母ハラ／＼として 聞いて 長人
同権が 母には すこし して 落ち 葉平
五分五分に されて 長男 不服なり 千舟



P★P

▼選刊申譯なし。主たる原因は電力飢饉で印刷機の榮養失調であるが、かへて加えて紙キンのインフレ値、雑誌は賣れても半分欠損非營利的事業だけに經營上容易ならぬものゝあることを察知して、たゞき今後の御支援が願ひたい。

▼「川柳塔」―近作柳樹一等の句稿は選の關係上、早く締切するため次號に廻つてゐるものが多い。全没と早合點せず、投句に精進せられたい。雑誌の顔を見てから投句されたものでは次號には間に合はない。お含みを乞ふ。▼川柳のため席のあたゝまるひまのない路郎主幹にとつて「續川柳講座」はかなりの負擔であるにもかゝらず眞實味の句に就て「か」止めの句、旅の句の三題目を發表された例句の涉獵には多くの時間を要されるので、その努力には並々ならぬものがある。特に御愛讀を乞ふ。

▼鈴木石鹿氏は冬ごもりを利して悠々「農閑裁筆」を、福田山雨樓氏は「愛語篇」を、安川久留美氏は「彼の後悔」を寄せられた。味讀ありたい。▼雑誌が遅れて申上げ悪いことではあるが句稿はドシ／＼寄せていたゞきたい。誌代も本號から値上げさせたい。誌代も内容外觀を少し飛躍させたので値上げした値段でもまだ幾分不足するのであるが、それは他の方法で償うつもりである。誌代のお拂

込みは當分概算でお願ひしたい。今に、編輯、經營共に軌道に載ることゝ思う。イヤ是非共、早急に軌道に載せたいと思つてゐる。御協力を請う。▼二月十日「番傘」の岸本水府、本社の麻生路郎、中島生々庵の三氏に浪華文化賞が授與せられた。路郎、水府兩氏は多年の功を、生々庵氏は最近の優秀作家として表彰せられたのである。柳壇のため同慶に堪えない。

▼佐野三造氏（八代市）元、奈良縣の觀光課に勤務されてゐた同氏は大和行脚のころを回顧され、三月か四月頃には一度奈良へ歸省したいと思つてゐるといふ懐しいたよりに接した。▼佐竹彰峰氏（吳市）は吳へ轉住してから既に十三年、戰災もがれて親子五人無事に暮らしてゐるとのこと。▼小池蛇太郎氏（静岡縣）は舊冬滿洲から無事引揚げられた。松盛壽枝女さん（大阪）が亡くなられた琴人氏の令閨で本誌の菊版時代には句會にもよく顔出しをされ女流作家の花形の一人だつた謹んで悼む。▼脇田梅子さんは正月を「わん茶わん井鉢の雑煮餅」で迎えられたそうだが、最近道頓堀の河岸ツブちへ無名居を建てられた。▼富士野鞍馬氏は清水市下清水四九一へ移居。▼水村京介氏は奈良縣五條町新町二五番地へ轉居。▼菊川泰平樂氏が下關へ無事引揚げられたとの通信に接した健在をおよこさる。▼二月二日濱寺支部句會開催路郎主幹出席。▼二月二十一日大阪通信病院川柳會開催路郎主幹出席。▼川柳下松支部では三月「善太郎居で第

募集

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樹（雜詩）麻生路郎選
川柳塔（雜詩）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樹」は一般作家の雜吟を募る

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事

執筆したところが、アレは誤報だツセ、新聞に取消が出てまつせと聞かされて弔電を取消し、悼辭を破棄し、再生の祝辭を申送つたところが、次のやうな二葉のハガキが來て紙上殺人事件にピリオッドを打つた。

○「小生誤死ニ付キマシテハ早速御深切ナル御電報深謝イタシマス再生ヤリナホシ今後トモヨロシク冥途行切符行列手に入らず又一つ誕生日ふえ小豆買ふ

○十八日附御祝辭拜受御禮申上げます足のあるところらんに入れます（としげを君自身の足のある幽霊が描かれてある）

▼池澤樂居氏は夫人を亡くされてから京都郊外に移り悠々自適されてゐるとのことであるが三月に令息を喪くされた由謹んで悼む。▼徳光秋人氏（下松市）は安東から引揚げ「子を泣かす罪な玩具も陳列し」といふ店を開いてゐられると加藤きよ緒、伊藤爲雄、武藤太刀雄氏等によつて近く「川柳むらさき」が再刊されるとのこと發行所は東京都葛飾區龜有町五ノ一五二伊藤方。▼西村佳唱氏はシベリアから復員された。▼高須啞三味氏は家族を諏訪市に残し單身、東京都港區芝南佐久間町一ノ五二に移られた。▼西村豊氏は戰災で郷里島根縣へ歸つてゐられたそうであるが最近堺市神明町へ藥局を開設された。▼蟹の目川柳社（金澤）では四月廿七日午後一時から小坂神社で一周年記念川柳大會を開催されるところのこと、本社からは路郎主幹が招請され出席を約された。▼大阪市交通局川柳會は二月九日午後一時から縁廊居で句會開催。▼福岡川柳教會では二月十一日に神天町商店街大集合所で川柳大會を開催

▲我が社では左の二支部を新設した。附近柳人の参加を切望する。下松支部（山口縣下松市堀ノ上）幹事 弘津 柳慶氏
金澤支部（金澤市榮町三〇）幹事 西本 安路氏

化膿症に スルファメゾン錠
デリマン錠
アルパジル錠姉妹品

B列5號 毎月一回一日發行
川柳雜誌 第二號
一冊 金五圓
（送料一圓二〇錢）
半ヶ年概算 金四〇圓
一ヶ年概算 金八〇圓
昭和廿二年五月廿五日印刷
昭和廿二年六月一日發行
大阪市住吉區南代町五丁目二五番地
行所 川柳雜誌社
發行所 川柳雜誌社
大阪市住吉區南代町五丁目二五番地
電話 四六五〇